

植田暁著

『近代中央アジアの綿花栽培と遊牧民——GISによるフェルガナ経済史——』

北海道大学出版会 2020年 xxxii + 231
+ 35 ページおびやちか
帯谷知可

I はじめに

本書が対象とするフェルガナとは、中央アジアのウズベキスタン、クルグズスタン（キルギス）、タジキスタン3国の領域にまたがる地域である。本書序論により詳細な説明があるように、一般的に広く知られているところでは、古くは漢の時代に張騫が汗血馬を求めて旅した大宛国として知られ、近現代史上ではソ連体制のもとでペレストロイカ期にソ連の「諸民族の友好」神話を覆す、いくつかの民族衝突の舞台となったことで注目された。近年では中央アジアにおいて最もイスラームの信仰篤い地域のひとつとして言及されることも多いだろう。

本書はこのフェルガナがロシア帝国およびソ連において綿花生産地という位置づけのもとでどのように変化したのかという問題意識のもと、この地域がロシア統治下に入った19世紀後半から、ソヴィエト体制下での本格的な農業集団化開始前まで、すなわちおおむね1920年代までの時期を対象とした社会経済史である。その目的は「自給的な地域経済が植民地化によってグローバル経済に包摂されていった過程を提示すること」にあり、「植民地地域における農業のグローバル化を扱う事例研究のひとつ」（2ページ）と位置づけられている。著者は「ロシア本土との商業的な繋がりという東西関係と農耕と遊牧という生業の南北関係が相互作用をしながら地域経済の構造が変化した過程」（5ページ）こそ、近代フェルガナの経済史の特徴だとみている。

本書の大きな特色は、ソ連におけるペレストロイ

カ以降の自由化により、私たち外国人研究者にとってもアクセス可能となった多数の史料（とくに統計資料）を、これまでそれらが十分に活用されてこなかった経済史の分野において広く渉猟・活用し、さらに近年進展の著しい地理情報システム（GIS）を用いた歴史地理情報学の手法によって農業生産（綿花）の問題を定量的に分析し、その結果を可視化したことにある。

II 本書の概略

本書の構成は以下の通りである。加えて口絵22点、図表22点、補足表7点がフェルガナに暮らした諸集団の生活世界を可視化し、また分析結果を提示するものとして重要な意味も持っている。

- 序論 綿花と遊牧が映す中央アジア史
- 第1章 フェルガナ盆地の諸集団——綿花モノカルチャーの担い手
- 第2章 クルグズ遊牧民とロシア人入植者——フェルガナ地方山麓部の動態
- 第3章 1916年反乱における現地民とロシア人入植者
- 第4章 ウズベク民族の創出——1924年民族別境界画定
- 第5章 綿花モノカルチャーの後退と復興——1917-1929年
- 結論 農牧接壤地帯の変容

本書は序論で視座と方法論を述べ、以降は基本的に時系列に沿った記述となっている。第1章では19世紀にこの地域がロシア帝国の支配下に入ったことによる綿花モノカルチャーの成立と、フェルガナの盆地部の定住民諸集団とその経済関係が描かれる。第2章では今度はフェルガナ盆地の周辺山麓部に暮らした遊牧民クルグズ人と、この地に入植したロシア人農民の関係が分析される。第3章はロシア革命前夜の1916年反乱からロシア革命後の内戦期という動乱期における現地住民とロシア人入植者の関係が検討される。第4章はソヴィエト体制下で1924年に実施された中央アジア民族・共和国境界画定、すなわち民族の名を冠した行政領域の成立を軸に、人々のアイデンティティや自称の変化などが

論じられる。第5章は前章で扱った時期以降から本格的な農業集団化直前までのソヴィエト初期におけるフェルガナ地方を綿花モノカルチャーの後退と復興という観点から描いている。

本書は、ソ連およびウズベキスタン、欧米、日本の先行研究をたいへん丁寧に渉猟したうえで、集落レベルに至る統計資料を駆使して先行研究の議論と批判的に照合しつつ、合理的な結論を導き出している。たとえば、ロシア革命後の現地住民による反ソヴィエト武力抵抗運動「バスマチ運動」による死者数について、従来ほとんど疑問視されずに語られてきた数字の修正を促す結論を導き出す(123～131, 143～144ページ)など、いくつもの新知見をもたらしている。また「ヨーロッパ・中央アジア間の東西関係の進展が農耕・遊牧の南北関係を大きく変容させた過程を、地理情報システム(GIS)などの手法によって明らかにする」(1ページ)とあるように、この時代のこの地域の経済史をグローバル・ヒストリーに接合することを意識しており、同時に、イデオロギーにとらわれがちであったソ連史の定説にも、ソ連解体後の中央アジア各国の基幹民族のナショナリズムにとらわれがちなナショナル・ヒストリーにも一石を投じるといふ意図も読み取ることができる。

以下では、3つの観点から、本書の特筆すべき論点に言及しつつ、一部の内容を紹介したい。

Ⅲ フェルガナという地域設定

フェルガナというと、しばしばフェルガナ盆地が想起されるが、本書におけるフェルガナとはそれよりも広く、フェルガナ地方すなわち「1876年にロシア帝国治下に成立したフェルガナ州の領域」(2ページ)を指しており、中央の盆地部だけでなく、その周辺の広大な山岳地帯を含む。この地域設定は本書の根幹ともいべき重要な点である。というのも、豊かな農耕地帯というイメージが強いがためにフェルガナの住民というと、まず定住民が思い浮かぶところだが、著者はこの地域の経済構造の変化を総体的にとらえるためには「盆地地域と山麓地域との相互関係」こそ重要であると認識し、この地域を「農牧接壤地帯」と位置づけており(5ページ)、山麓地域に暮らす遊牧民に着目する必要性を強調する

からである。そのことが本書のタイトルにあえて「遊牧民」を含めている理由であろう。評者は、フェルガナ地方での発掘調査をライフワークとする旧知の現地考古学者の「フェルガナというのは古来常に定住民と遊牧民が接触する境界であり続けたのですよ」という言葉をあらためて思い起こした。

そしてこのことは、より長いスパンでみた場合の中央アジア史のダイナミズムの捉え方とも深くかかわっている。著者は「生業の差から生み出された草原とオアシスの南北関係、ユーラシア規模の人とモノの移動に特徴づけられた東西関係の二つの軸」を議論の前提とし、そして「二つの軸の結節点」(1ページ)としてのフェルガナ地方という見方を明確に提示しているが、その意味では、北の遊牧民と南の定住民の相互関係から中央アジア史のダイナミズムは生まれるという、間野[1977]が提起し今日にまで継承される中央アジア史に対する基本的視座が近代史の事例において見事に体现されたと言ってもよいだろう。

Ⅳ フェルガナにおける多様な集団とアイデンティティの変化

評者自身も1924年の民族・共和国境界画定に大きな関心をもっており、第4章はとくに興味深く読んだ。複数の統計資料を注意深く扱うことにより、多様な集団の複雑な空間分布とその変化を地図上に落とし込むことに成功したことには脱帽である。そこには著者の「地域内の諸集団の変化への適応にみられた多様性は、経済学における多経路発展の具体的事例として意義づけられる」(2ページ)という大きな見通しが存在しているが、これまでもしばしば議論されてきたサルト人からウズベク人へという変化がたいへん具体的に集落ごとに確認され、またその一方でウズベク人に同化しにくかった集団もあったことも明らかになった。

ただし、この2つ目の観点に関連して、いくつか課題も残されているように思われる。

著者はフェルガナの諸集団について「エスニシティ」という語を用いているが、民族的あるいはエスニックな集団に関する学術用語はいくつも存在するので、これの採用については説明ないし用語の定義づけが必要だったのではないだろうか。統計上に名称が現れる集団はそれぞれ均質な、横並びにしう

る集団だとみなせるのかという問題もあるだろう。

また、細かいことではあるが、口絵8などに見えている集団名「中国」「ペルシャ」は集団名としては馴染まない印象があり、誤解を生む可能性もあるかと思われるので、原語をカタカナ表記し、注で説明を加えるのが妥当ではないだろうか。

さらに、アイデンティティの問題は定量分析のみで語れるか、という課題はやはり残るだろう。アイデンティティの変容があったことが確認できたとして、それはたとえばどの程度の時間をかけてどのように変容したのか、変容とは何を意味するのか（漸次的で自然な変化なのか、アイデンティティの主体的な選択なのか、統計調査の時の自らに関する「名乗り」の選択の問題だけなのか等）、従来中央アジアの住民について議論されてきたアイデンティティの複合性・重層性をどう考えるかなど、疑問は尽きないところである。信頼に足る史料があるかという問題はあるのだろうが、当時の現地の人々の世界観や信条、政治運動などに関する研究との組み合わせによって、あるいはより豊かな結果が得られるかもしれない。

なお、中央アジアの民族・共和国境界画定について、クルグズスタンの研究者からの発信として、Койчиев [2001] も参照してよかったのではないだろうか。

V GIS の活用

GIS の活用は本書の最も大きな特徴のひとつであろう。評者の所属先（京都大学の旧地域研究統合情報センター）では、「地域情報学」(Area Informatics) の名称のもとに、情報学の専門家と地域研究者がタッグを組み、地域研究に最新の情報学のツールを組み入れ、時空間情報やビッグデータを扱う試みがなされてきたこともあって、本書で中央アジア研究におけるデジタル・ヒューマニティーズの先駆的成功例を示したともいえる著者が、今後どのような形でこれを発展させていかれるのかが注目される。著者も2012年設立のアジア歴史地理情報学会に所属しておられると拝察するが、近年では研究成果の提示手法やツールもますます洗練され、多様化している。本書の成果、たとえば多様な集団の分布状況の時系列的な変化を表示するような試み

をデータベースなどの形で、公開・共有し、残し、またプロジェクト化してアップデートを重ねていくというような可能性は現実のものとしてあると思う。中央アジア現地との協働も含め、研究成果の国際共有という意味でもその意義は大きいだろう。著者には中央アジア研究におけるデジタル・ヒューマニティーズを牽引する役割を担っていただくことが可能なのではないだろうか、いささか勝手に期待を膨らませている次第である。

VI おわりに

本書は全体として、非常に丁寧で堅実な学術書であり、中央アジア史、ロシア史、ソ連史に跨る必読文献となるだろう。また人文学と情報学との接合もしくは文理融合のモデルケースとしても学術的な意義をもっている。

最後に、先行研究としてバスマチ運動を扱った拙稿 [帯谷 1992] にも言及していただいたが、評者には切り拓くことのできなかった角度から評者の提起した疑問（「バスマチ運動の指導者にみられた強い反ロシア感情にもかかわらず、なぜムスリムとロシア人の連合が成立しえたのか」[帯谷 1992, 93]）に対してもひとつの明解な回答を示していただいた。そのことも含め、この労作に心から拍手を送りたい気持ちでいっぱいである。

文献リスト

〈日本語文献〉

帯谷知可 1992. 「フェルガナにおけるバスマチ運動 1916～1924年——シル・ムハンメド・ベクを中心とした『コルバシュ』たちの反乱——」『ロシア史研究』(51): 15-30.

間野英二 1977. 『中央アジアの歴史』講談社現代新書.

〈ロシア語文献〉

Койчиев А. 2001. *Национально-территориальное размежевание в Ферганской долине (1924-1927гг.)*, Бишкек.

(京都大学東南アジア地域研究研究所准教授)